

乳がん患者を救う“乳房再建”



形成外科・美容外科
副部長 吉村 圭

乳がんは女性のがんのうち最も頻度が高く約10人に1人は発症すると
言われております。逆に、早期発見の診断技術も向上し、
比較的治療予後の良いがんと言われております。しかし現実では躊躇し、
治療になかなか踏み切れない患者さんも少なくはないようです。
乳房再建はそのような乳がんの患者さんに対して一つの希望となり得ると考えます。
今回は、この乳房再建に関して簡単に解説したいと思います。

乳房再建の種類について

乳房再建を大きく分けると、自分の組織(自家組織)を利用する方法と、人工物を利用する方法に二分されます。自家組織による方法の多くは皮弁移植という古くからの方法で、乳がん切除部位以外にも大きな傷跡や変形が残るといった最大のデメリットがあり、患者さんが受け入れにくいといった印象がありました。しかし、人工乳房による再建が保険適応となったことから、この方法だと失う物を最小限に抑えることができるという理由から、患者さんは以前より積極的に乳がんの治療と向き合えるようになってきました。



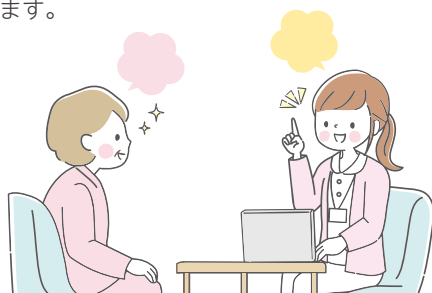
脂肪注入による乳房再建

自家組織を用いた新しい方法で、「新たに大きな傷跡を残したくない」「異物を体内に残したくない」といった患者さんに適しています。欠点としてはまだ保険適応外で自費の治療となること、手術回数が多いこと、あまり大きな乳房は作れないといった問題があります。しかしこの方法によって完成した乳房は他のどの方法よりも自然な形態を維持することができます。



人工乳房(シリコンインプラント)を用いた乳房再建

乳がんの乳腺全摘と同時に再建を行う1次再建、時期を改めて行う2次再建とに分かれます。いずれも人工乳房挿入に先だってエキスパンダー(組織拡張器)を挿入し、皮膚を拡張させてから人工乳房の挿入術を行います。つまり1次(同時)再建の場合は2回、2次再建の場合は3回の入院手術を要することとなります。



乳房再建にはこのように様々な方法がありますが、1つの方法にとらわれずこれらを組み合わせることでより良い結果が期待できると考えております。



当院診療科
HPはこちら

